語林類葉

やゆよ　十八

ホ 2
502
18

門 號 502 卷 18

語林類葉巻之十八

清水濱臣輯

也行 やの部

一言

や 人ヲヨブニ名ノ下ヘツケテオフ今モシカリ

源上 若菜 朝臣やさやうの落葉をだにひろへ○又ヘツケテイフモ
リ○今昔廿四 五 其遣戸ヨリ頬ヲ差出テ耶ト巳
レ此ク有ケルハ只来レト云ケレハ○

や 人ヲ驚声也

後拾俳諧 鳥もさへるときもあはしきえつ思ふやらふたさそおもふかな

○源 夕影をさふしてやとおとろうしなへくさ ○

吴異記 ○同下 十六条 訓釋咄 夜

箭や

今昔廿九 五 鳴箭ヲ以テ射次ケヽレハ○同 同

四人ハ箭庭ニ射殺シタリケリ 同

や

猿やヲ畧シテやとのミいひて 申ヲ畧シテ俳トノミイヘル

例ニ同シ

業平 歸りの別 十一ウ けふ[illegible]人[illegible]

やにいえもいそのこと ○

某屋

今昔廿四 廿六 在原業平ト云人中将ニテ有ケレハ大臣屋ニ着タリケルニ女車ノ大臣殿屋近ク立テ物見ルアリ○同 同八 卅五 条油ノ小路辺ニ荒タル檜皮屋ノ内ニナン下シ置ケル○

方丈記 [illegible] 十般にして東にかりやの一の[illegible]

[illegible] 住居 [illegible] 十 [illegible] 一 [illegible] 居 廿

大臣屋
檜皮屋
居屋
平屋
蕈屋
宿屋
借屋
竈屋
破屋
鷲屋
唐門屋

結屋
毛屋
火屋 ホヤ
ヒメキヤ

屋とかりそこなへてまかしくしくはやと候ふにぞ

○盛衰記廿三ヒラ〳〵ナル仏子（平家宗盛）モリイカニ騒

ラニ柱トタノム助ヲ落シテ、マテニサ侍離盛ナカケタリ○

新六（蟬丸）世中いとそもかしてもなきしあともらやもちてれまて

○今昔廿五 十三 梢ノ外ハ宿屋ヲ覚ク○類史八

神祕 弘仁十四年十一月癸亥以中務省為主基

所作借屋用之

為忠後百（親隆）清おつむあ海のさ海やに窓ふしてまくいさへ志あらひはり

同（頼政）やふまやのちらけたるひくま風ふいてさしみともなる涼け

○今昔廿八 卅五 大臣屋○同廿九 卅三 家ノ前ニ大

キケル榎ノ木ノ枝滋ク若霞タルカ有ケル下

ニ鷲屋ヲ造テ其レニ鷲ヲ置テ十ム飼ケル○

同卅一 五 南ニ近衛ノ御門面ニ唐門屋ヲ立タ

リ○同 同 同 舞臺結屋ナトノ照リ曜キ○和泉

式部集 とのへ行にうつらやにおやいふとのつる

を見てうくらして其秋月のくらくらうあるを見て

家まさなのかきそもまされみつるとやのかすにやまさん

後拾恋二（実方朝臣）忘られて又うつらはかちらやのわすくゝ煙たえなむとせてそう

同恋四（長能）夏かんうをもとのうつらやのかり分く焼らさうえいてしもむなひて

○和名抄助舗并色立成云ト（和名古夜）如衛士屋

蜆屋
サヽヤ
浜屋
アフリヤ
ハツヤ
菜屋

世○大和物語　打出の浜にちりつ衣かへしほしてぞ
きぬやなをかくして○同　又同まかりける檜皮屋
のあもに

同
霜雪のふるやのあれにまよふ衣のうへの袂のあまのはさし

菜屋

方
鹿にのり古屋と

○江次第一　廿七　又従安福殿南行東東折従
屋東北角南卅至于永安門西披張同幔　蜆屋

宝治百首　為氏
あ川瀬のさゝやのとまのかりふしにそでもぬれつゝよをあかしつゝ

文永廿五　覚延法師
みなれてのはやのあけゆくふき間をも月の影ぞさしき

同廿七　仲正
笹のあれは霰やにも波の音のみぞきこえし枕を

同卅　山家述懐　源仲正
ふるくのかきねにかくるあさがほの花をみてや山陰にして

同廿二　笛　仲正
柴の葉やの山笛に折合せある　かへつみや

同廿一　墻　西念法師
霜ふりきたのふるやの垣根にあけをみるふ茶のふるふき

○　契沖云　植　○
生屋　歌

やう　二言
宅○家○家持

源重屋　やうなれ川このよみかなら川をいとあやふし○

やく　役

後拾春上　和泉式部
なにはえのあしのはつはも見えなくにまたきのふるえをやくなりけり

同恋四　さがみ
やくとのみ枕の下にしほたれて煙たえせぬ床のうらかな

続千雑中　紫式部
よもの海に塩やくあまの心からやくとはかかる歎きをやつむ

新拾恋二　和泉式部
ちきれ海のあまのしほたれみしかとも煙やくとは絶えずもあるかな

万代恋三

夫木廿五　家　隆信
神の浦にたくあまのやくしほ煙あまりしほるなあまのぬれ衣

源頼政
しほたるゝとやくにて焼ぬるあまの歎きや絶ぬらむ

二条大弐集
いかにせむあまのかるものおもひとやくうらにしほたるるらむ

ーー紅梅
ーーツヽジ
ーー菊
ーー山吹
ーー梅
ーー桜

和泉式部集
しほなれやくとはかきつむあまならはほるふもとの浦の庵

〇

やへ　重

拾遺雑賀　八重紅梅　〇　沙石集六　やへつゝし

山　山門

古今離別　山にのほりてかへりまうてきて人々わかれけるついてによめる　幽仙法師　〇　山ハ比叡山也　此頃ヨリ延暦寺ナリ

山トイヒ三井寺
ヲ寺トイヘリ
至道下山の歌合に　ととへ人ゟに

山桑山之

後拾遺　君か世のときはの山の女のみねの外
とに　右大臣
あみかさる苔のみとりの枝かはしなからつちをまもれとかなしん

や清泉
廿七
いきのもとに思つる程を山ちきの花にかゝらつらむぬしむ

ーーちき
ーーつき

ーーきみ
ーーかはむ
ーーせり
ーーー
ーーうちら
ーーうみ
ーーうつほ
ーー作ー
ーーふき
ーーとう

○古今俳諧　山ふき　○和黄精オホヱミ ヤマヱミ　○防
葵ヤマナスヒ　○當帰ヤマセリ　○知母ヤマシ　○蜀漆ヤマ
○藜蘆ヤマウハラ　○白蘞ヤマカヽミ
ウツ　○梔子ヤマナシ　○款冬ヤマフキ　○楊梅
キ　ヤマモヽ　○慶柿ヤマカキ　○

や、　人ヲ呼声也
大和物語　をとこて山の奈　やとこひつしもせで
古今夏
やらや消て山時鳥
○棠花　ゆかしておもふやあきちく馬に世人てちかき

しなてはへらせ給へと○枕冊子 廿八段 やう書にこそ
きたなけれともや○伊勢物語

ヤウノモノ
三言

やうき 様器○土器ナラズシテ塗物ヲ云○或云今 云形ノ物ナリ

枕冊子 大夫のさふらひ上の御時 雪のいと高うふりたる
をやうきにもりてまいらせ○宇津保 蔵開 上 上文から けにあ
きよらなる華 あわつきかくたてつきてきよけなるいつくへし 土器に
あまたのくだものもりつくえれるやうきとゝうつくしく
てかたいかしあへいこと 様器 やうきたへて侍ことあ

させ給ふ○營繕令云凡營造軍器皆須依様令鐫
題年月及工匠姓名 謂様者形制法式也○源 帥 あやしうや
うれしきのく神から絶しうおほさるゝ佛の御ためし
さるかはし 承陵 承云 いつとも同しやうにたへ うちくへいやうきのとのものさかなる○同 はゝき あけ
さのゝやうのものとれしとてしあらんも ここ 大君の同の棚に 中君にも猶たと
しけ上御 きよ給ひ○同 東屋 いさゝやうのもれとくみてしを仏なる
さらちせ御もゆくあやあて御し 中君の方にもこゝ君にお さいひまて君にもれうへ
なくは同しやうの かれもしく ○江次第 抄五 石清水臨時祭 執杯
様器在庇 付之所敷○挟衣一下 十三ウ やのとのとあやしの
人をへやうとられんの ○同二下 卅八 さのとこ

やまのゐくいとゝきあて出つるんさうてらぬからきらも
御かうゝ侍るくはと〇源氏 白言 あさゝも何かいやうれ
ゑひしきのかうらしくいとしつをきくて〇花鳥様
字ハ器にて様器といふ也様の器也西本のあるにつきて
いつ支へ用しやうの物とこそのんかれとはあらくへいまかれ
やうにてといつるにやし〇宇都保 藤原中 同 せんうらのつくゑ
ゑうき様のやうきもの様のうへけ〇源氏 若木 白銀の
やうき〇花 天暦三年沈香折敷四枚紫檀臺以上
器銀様器供御肴粉熟有赤染火爐銀銚子〇源氏
初子 花鳥引李部王記云此度氷驛也 唯進湯漬 又用様器

〇兵部式云凡諸国様器仗着 云々

やがて

俗言ノオモツケト云意ニ用タル後傳也 今ト云詞古ハイレマニノ意ニテ後世ハ 即吹リトドスヤカテト 用拾古今表裏十リ

志の記様下 やがてくも四ちかりのおえ侍らくのまへい

〇

やゝし

大和物語 み聞もかく侍る記そうやのおもにつきやく らねとあまて〇

やさし　優

栄花　三月花　いとしういたはしうやさしけにありつるきこえさせ給ふ○　散木集九月十三夜於宰相家衛泉亭詠歌序やさしきことみゆあり

山家集
夫木廿六
月清み秋にとつまでみけるかけのやさしかりしは月くまなきえん

やさく　え

江次第　枚三　之者矢佐(ヤサヘ)戸○

や川海　屋軒

栄花　いときよげなる　うちわかぬ　いとやさぬ海のあや名くさ長きかやくしにものわしてやつきにそるそのとしも

やわせ　梁欄カ

万代秋下　師頼
杣川のわもとせぬ名なりにやわせの浪の音のきよる

続後拾恋二
万代恋二
いまつにあとぬるき身の衣川やわせの浪を袖にかけつゝ

詞花集 好忠
川上に夕立すらしみくつせくやなせのさなみたちさわくなり
新古今 定之
杉の川やなせの波もさわくらしとみちやいろちもしせらむ
壬二集百首中
堀百首

やねゐ 屋根居
為忠後百首 頼政
あやの池につらゝのやねゐむすひそへていそうち雪のふゝき
○今俗云ノヂ也 ○

やらまと集 罵詞也

宇都保 為周 今そのやまとまもちうこそのゐみるとて
川まえなりて まもちの名をいふ ○

やはらく集
赤染集二 為基
みち国のちのあまりからきこをやはらくるこゝろにてもしやみん
同返し 赤染
そのかみしやはらくにせよとのもをもらさてやいかなくらむつき
後拾雑六 赤染衛門
きゝもあらいあまもやはらくかしさくはほそちにつけてあはれなりかし
○家集 十 ○ 源少女 なほさえをとらしてさそやはらく
なまし心の世にをちこちうまくもつらく侍る也 ○愚
管抄四 云 和漢のまに通て北野天神の御跡を

―――人
―――魂
―――御家
―――相
―――詞
―――琴

つき又知足院殿に人々してやまとしゑまうしけるのはさり
て○後頼無名抄　やまとみことのうたは○千載
序やまとことのはは○同は河も八雲のそこをと
きのきこえしやまとことのはのさかえにいまもつ○
愚管抄内大臣伊周公ハやまとこころはわろかりけ
る人也からざえはよくて詩なといみしくつくられ
けり○源桐壺　みなかしこき道々にやまとさう
ざおほやけし○今昔廿九　廿　善澄才ハ微妙カリケ
レド露和魂无カリケル者ニテ此ル心幼キ事
ヲ云テ死ル也○源東屋　そのやまとこころはなきにつ

きかくれたるにかあるぞと云　女ヲ
夫木廿三　仲正
よろこぶあるもぬるやかに車やまとことのはけいまひとる
○大鏡二　さるはやまとだましひなどはいみじくおはしま
したるものを○源少女　なほざえをもとしてこそやまと
だましひの世にもちゐらるゝかたもつよう侍らめ
続古雑下　侍従行家
やまとみつまきるふみとをもあはれにつけしやまとおもひの
同同　源貞親
爾よろうの中道をこそふみにならふやまとこころよ
○長秋詠草　長方　あきらかに人こそ見おきしやまと
ことのはのふることみちをと云々○

やまふ 病

都のつと跡 あるいは静をかのむかしと身にしみぬやまふ
ことぞんしける○今鏡 中 佛像をやきうしなひつれに侍り
てはやまふおもくなりしかど○続後拾雑下 やまふに
まつとなるこのよをさしおもひ侍りて○

やみ

続紀三 宣命 多利麻比豆夜々弥賜閉波○源 胡蝶
おほし所やあらんとやまひきを 河 んやまひしきし
○同 さか木 柱 人のやみあるほどもれなくあきゆき
にあきまておもしろふ○同 御法 祈うらん道にも入
なくやゝやまひきを 見合セル 二テ叶ヘリ ○同 宿木 いと
くるしげにやみてそのしおもくて 見合セ ル心 ○河 良見
○同 浮舟 んちもおもくなりしやまひおもりて 河 ん
やまひきえ○浪雲三 丁 廿四 ○栄花 疑三 下 さうまたこう
とのゝえりやしまうときやまひけに思ひいりやなりつか
○三代實録四十 六 詔政事若壅滯 世モ 加此 世々美思
保之 今本已々美三字 天 十三 古本ニアリ ○詔辞解一 下 廿四 漸見ニ
テ今云見合ス心也 又心ヤマシキニテモヨシ
○

栞やらは

遊糸田記　時ならひぬとはいふ所でもえいそやらは○

やつらし

新六　源東屋　やもとらふとめさしていまさ所明さればい
ちらさやらとのあるらうかみ

○江次第　不清于除時祭　卅云於高遣戸下立地
給之○

やわらう　和ラ

大和物語　やはらかにへまろひて○源　藤壺　やわらかに
川いはまろひぬるかしきわらはい○

やをとも

盛衰記六　門府ハ打頷（ウナツキ）許涙リミ給テヤヲレ家
負負能ヨ○

やつくろ

四言　燒跡（ヤキアト）ノ和ヲ音便ニテ　イカヨハシアカヲ
略シテ加ヲロヘミ也○又按ルニ燒（ヤキ）ト野十

ゐし

隆信集 恋六 まいれるを そへてやいとう侍しを
るに○拾芥抄下 末 灸治穢着七日居灸之人三
日云々○行阿假字遣

やうし

源 胡蝶 やうし侍りなれはなむのしゝなふ○同 若菜下
人々のうへいかなつらしやうしまけし○唐鏡 やう
くの勝地は幸して○同李夫人をいわまほしみて
やうしにとてはさまいれは○

焼石(やいし) 今云温石

大鏡 時平公下條 光信の条 ふの條光大将八条に住給へい内に
参りなふほとのいとさむかりけるにいとかほしけれは
をちものいとかほきけるをとゝむちむささきをとへ二つ
焼てやきいしのやうにあたゝめてをちまへりけるにこそ

○十訓抄 ○盛衰記

○暑和温石 方言要目云温石

○本艸和名温石 ○蒿々集 二ノ四 侍

焼石あてさせたらんやうに侍りまさて 中略 侍やき石も

ゆゑて有りぬへ

焼印

逸史一引日本紀略延暦十一年七月戊午禁桑乗鞍橋伽伯背中所司焼印用之○

焼漬（ヤキツケ）

今昔廿八十七 焼漬ニシテ持来ヲ平茸ヲ也○

焼物（ヤキモノ）

今昔卅三 今ノ妻煎物ニテモ甘ニ焼物ニテモ美キ奴ワカシト云ケレハ鹿ナトヘリ○江次第卅二雉焼物一杯○

やそさか 八十坂

尚歯會序 やそさかにこえてかしらへ侍るそち

拾遺哀傷下 百とせハ八十の坂にちかけれと神のめくみやちとせなるへき

○

やけむり

竹取 わさと來るやりとをとゞめしとのかひて ○同
かくや姫てふ大ぬす人のやつが ○古本今昔 盗人
うつるやつはかくつときそ ○源 よ習 とにもあるぬやつ
とらふさ彼いふれをきり ○今昔十九 卅五 此搦メタ
ル盗人ノ奴カ○

やとせ子 八ツニナル子也
古九 長哥 あしひきのやまのこのもとをやとせ子の
此の時 ○ 十二 ○ 古十三 家の八とせをきる髪ぬ
○古 初條

やどもり 宿守
源 松風 やどもりのやうにてある人を ○同 あつまや
安部 ○丈木卅六 二町 諸下向 後侍ども 見え
さうしうへられる 漂々氣 おた活
稀とおしめしぬやどもりおもくにこしあるやりさいつきぬ
○

やはらひ
後撰雑四 女將作て 聞みそかむはる時あかひを たり

ける女蔵人のきしにつほやなくゐおひたるをやうし
あきて○枕冊子 廿八段 つほやなくゐおひたるまゐる
しんの○西宮記云諸衛府佐有御出時負壺胡籙

○

やとりて 八 枚盤○八周手
神武紀通証八 廿九丁 詳見
保憲女集
年ことにやすらちんのやとりてにうちまれとうちはなりん
夫木 七 沙弥
神山のこしものやとりてちちきくきくらくえいのる月かきぬり
新勅神祇 家持
やしろのこのやとる葉をやとりてたさしてしる神のつやき

○

やふさめ
続世継 かうふり 白河の院のやふさめしていふくはらん
しけりに○新猿楽記

やへ
公任集 中務のみこに八重葉のおりてふみつけてあそ
ひしゆひける
おりへてとしふる葉はやへの花のしもあてもえてきける

後拾雑五　清輔集

やつくの人はたのたる信山おいぬるかにいふすりける

〇袋艸子〇大鏡二　やつくの清おもふあてさえなくそ

あつきまへける

山さ川　山ノサハミ之

為忠後百　仲忠

山さ川の廉木のうけやこほもねはおちの月はいつきすける

やまさと　山荘之

源　夕霧　小野といふ里にかよふにおもしろきにまゐりける

まへるる〇

山城

逸史三引紀畧延暦十三年十一月丁丑詔曰云々

山勢實合前聞云々此国山河襟帯自然作城因

斯形勢可制新号宜改山背国為山城国〇

やましろ　山賊

都土産　ともかれる道もやまちかれといひてんとあ

やまかはなくし〇

山伏　信也

後撰雑一　素性

ふのしはきちらせへてもえしかゝる山ふし何にあふらく

○六帖○家集

後撰雑二　とゝ人念法

いつちとも西ともしらぬ山ふしの行ける所にふらんふしき

○六帖○素性集

○増鏡　春別　資朝も山伏の出立して柿の衣にあやゐがさといふものきて○源　若菜　行ひつとめたる山ふしなどて○東鑑十三　十六　毎夜夢中山臥数十人群集于童成枕上乞件幡○

於さ　山伏も行ふしも

山ぶし

後撰雑一　法皇ゐしのびてかほんぞうしありきてふしのあひまたに○同旅　法皇とほき所に山ぶしあるひて○源　玉かつら　山ぶしに侍りて霊なる人をゐんとしたてまつりつけまし○

箭目頁

今昔廿八ノ一　此御社ノ御箭目頁ナニ物ヲ○

ヤワタリ
家渡

今昔廿七 廿一 吉キ日ヲ取テ渡ケルニ例ノ家渡ノ様ニハ无クテ酉ノ時許ニ宰相車ニ乗テ畳一枚許ヲ持セテ其家ニ行ケリ○

やとりゑ

松逕集

○土御門通親公厳嶋御幸記云清神楽のやとりゑ八人

万代神祇 九十良 能宣

夫木十一 宗集 伊勢

やとりゑの神かくらにゆふかけてこよひの君をいのりてそ祝ふ

○六帖四 同 伊勢 ○夫木廿五 女 やかもん山家

新六 にやとりゑしくる○

五言

やうし

様々ノ音之○様体らしく分体らしき意と昔日

長明無名抄上 おほかたやうしはしめてやうしんにいまたんておもへるつきをもみんを待ゐ○同上 やうしくるかえいてきしうた○同上 あまきるあさの

堂

おほきにやうしきつきえはましき○

屋形船（ヤカタブネ）

東鑑四十六建長八年八月廿三日渡御泉屋以
金銀以下作屋形船一 金五十両色々絹帷三十錦三段呉綾一端南廷三絹三十墨二紫扇五十本也 被置此所 ○コレハ金銀ヲチリハメテ屋形船ヲコシラヘテ置物ニセシ成ヘシ ○

やかつかみ 家神

為忠後百首 神祭 為業
さかきとるやかつかみまつるみはふりにとやかくらかねらむ

同 同 仲正
山かはのかきねにいつるやかつかみ御祭さしるをみたとえるかな

久安百首 清輔
榊葉にゆふしてかけてやかつ神まつる宿禰とる神の祀

○

やそしまの祭

江次第巻十五

月詣集

○新勅撰後白河御時やそしまの祭に住吉にまかりてよみ侍る 長方
神代やいくよへぬらんやそしまの世々のまつりをとし

○八十嶋使 続古神祇

やまうつほ

讃岐日記　御のやまうつほにもえもみなことなれと　大嘗会の原也　とも見ゆ

やないばこ

榮花　初花　物のくはかずあるふとやないばこに入て持ゐまいり○延喜式内匠寮式年料柳筥一百六十八合　一尺六寸以下一尺以上　織筥料生絁一十二疋○續紀九　元正天皇　養老六年十一月丙戌云々　銅鋺器一百六十八柳筥八十合○延喜式ニ出ルヲ考ルニ今ノ柳行李ニヤ編糸ノ[illegible]アリ

やぶかくれ　藪隠

山家集上　風ふけは花の雲のやふかくれわけのこたえとなくなる　夫木廿七同

やまかへり　山ヨリ帰ル柴人ヲ云

高野日記　しは申なとのをきのみちよりかへるみなへともかりけれ

やまこもり

後撰集二 男のほとなしありて侍てきれみはらの
いとつきに十二年の山こもりしけんなりしかきこえ
まつるとて ○枕草子 おほつかなきもの 十二年の山籠
りの法師のめおや ○続千雑中 萬ちの道にも發
時に千日の山籠し侍ける冬の比中かしける 源兼氏朝臣
いかにしておもひ絶けん世のうきをへつる霜の深き山路に
返し
○千釋数 こえの山にとゝ 千日の山ごもりみちはんと
を○今昔十三 ゝ比叡山ニ登テ出家シテ法花
經ヲ受ケ持テ日夜ニ讀誦シテ十二年ヲ限テ
山ヲ出ル事无シ○古事談三惠心僧都妹安養
尼終焉之時着必可來會之由僧都契約云々而
僧都千日山籠之間 中略 雖然限日數之山籠難
出洛云々○類聚国史弘仁十三年六月壬戌傳
燈大法師位最澄言丈如来制戒随機不同衆生
發心大小亦別望天台法華宗年分度者二人於
比叡山毎年春三月先帝国忌日依法華經制令
得度受戒十二箇年不聽出山四種三昧令得修
練然則一乘戒定永傳聖朝山林精進遠勧塵劫

許之　又云天長八年夏四月下丑天台之宗年
分度者受戒之後一十二年不聽出山四種三昧
令得修練之故也

山ちやし

大和物語　山ちやしにおこなひありきけり○

やま川とり　即山鳥

万代集二　仲実
やまとりのをろのはつをのかゝみにかけてとなふへらなれや

○家つとり　鶏　古事○野つとり　雉　同○時つとり　鶏公

散木

六言

やこゑの　鶏

千載五　雉類
ひとりねの関路にきゝしやこゑの鳥にねをそへつる

やつをとりぐさ

林葉三
峯の雉子何のかくらん花さきの四枚のやつをさかくさ

○

やほのきら 屋毓ノ柱ニカ

嚴嶋諸記 風ふけはふきならしてけれ杉のやほのきらきら次
をりてけり

やまほけきやう

続詞花中○神中八廿四○万代二恋三十五
ウ

やまのあなた

古今雑下 よみ人しらす
みよしのの山のあなたに宿もかな世のうき時のかくれかにせん

元亨秋宮 権僧都子嵯峨所
とひきしも山のあなたのあさかたにあさましのはすへけり

小家集上
あやしくも山のあなたにあるものをたつぬるうきさへしらぬなるかな
松葉集 草上廿九

病

拾玉 智
思ひやるきさらきの夜ありけのやまひのきりわけのみたれ

同 礼 病而消滅
法の風に秋の露まへもなひきし志ほるる花ものこる世の中や

○新撰朗詠 基俊 集書
命露未消病霧侵霄

やみさうして 病盛カ 病降カ

業純 御このみ
四十六
たれ人もましてやみさうてのれるをなふ

やんごとなき

後撰巻上 あはせかりにやまひへおもくなりて侍りける
ほどにやまひて侍る人の家のしきをかとふ
うけて侍れどもやんごとなき事にてはうりのほ
まかりあるまあやのもとにつかはしける ○同恋
二 ことはき所にまかりける道よりやんごとなき事にて
まて京へ人をやりけるついでに文のうちに書つけ侍け
る ○同恋三 やんごとなき事にて遠き所にまかり

てえん月ばかりにゆかへまかりてつきしといひて通う
らまりて遣わしける 定家 ○同恋三 おほやけ
つかひにてあかの侍のうへへまかるとてしらせてあり
しまうかにかくやんごとなき道にまかりけるにもあらで
使つかはしけるにてかり侍るを 下略 ○同雑一 や
むごとなき人二三人を具して 云心也 コレハ今 ○同雑二 物
思ひけるやんごとなき所にてかくしまかしても
是は今云心也 ○同羇旅 中宗の宗貞の国へまかり下
まで侍る道にかの家にやどりていひつきてさらう女
くおほえ侍りけれは二三日侍りてやんごとなきに

かくてあかりまちはきいきぬとつくりて ことさらに
書てあかり侍る○大和物語 さてかゝりぬるほどに
てつる人のやんごとなき所にいましけり○不
得已といふ事也 毛詩に 王事无盬 とあるところか
ほやけなりの仰つけられし事なれはいなひかたきに
なしなといふの事也 されは大かた轉して貴人
をやんことなきなといふ きん人の事も躰貌に用
しらしときこゆ 轉せし也 此詞後撰なとに見
京の書たえあまりは源氏後たとのいふ詞也 皆
此の轉用にてしんなつしもかよはす後の轉用し也

る所にのこりて 堂くなからも なきもの所なし 無
病息災之 所といふいみしき誤也○花鳥 桐壺 きこえ
給て上らうの事といふ後さらさらんの所にてしかりしぬ
物なれはやむことなきさもいへり とて 此語はこれ 但後
撰なとをみるへし
にゆるしかたし ○

や

やうやく
今昔 阿弥陀仏ヤウヤウ〇同廿条十二 阿弥
陀仏我ヲ殺ス有ヤヤウヤウト音ヲ挙テ叫ヒケ
ル〇

七言

やうせいの竹

う紹深 条使 やうせいざえいありかなしや○同 同 其

やうせいとやいくりみいつほんとけや○同 印本 初秋正 古本 仲律白浪

やうめいらうあるへ

病

病のむしろ

愚管抄 三 吟病のむしろに明宮ヲ集りあひて○帰

傘本類抄 また つきゆ 使 に なり○

やまふきのさき 山吹崎 近江

晴蛉日記 府山に集りてうつりいり湯山吹の湯ほ

源胡蝶 といふ宿とてやそ 風ふけい波の花まえいうらえて山や名にかえるやまふきのさき

○

八言

やくの国みりうの王

江次第 石清水臨時祭 蝶盃銅盞近代不行也云

延喜三年十一月廿日加茂臨時祭五献後夜久螺鶴進侯等（九中将公頼　右中将仲衡）次銅鶴進陪従○枕冊子

十言

八戸主の家

今昔廿一（五）家ハ西ノ京ニ十ム住ケル堀川ヨリハ西近衛ノ御門ヨリハ北ニ八戸主ノ家也南ニ近衛ノ御門面ニ唐門屋ヲ立タリ

やへむくらにはあれぬかる集

月清集上

百代草かれてしきを　不住

思ひ出ハやへむくらにはあれぬかはあさちのやとは人もふかくそめてき故郷やしきハあれぬるしきの龍くらへむかし世に似さりけれ

○

やへむくらにはあれぬかる集

十二下

さひしさのやへむくらにはあれぬとやうちのしらの山にはとはるものかは

門中

故郷のやへむくらにはあれぬとありしのをたにもやれぬ浪の袖

新古　ふる　有家

うちすてゝあれぬとかれしふるのあるさと海ならぬ身を嘆くらん

同　ろく　永

故郷のやへむくらにはあれぬかくのちのさとのさきはひ[illegible]

古今恋三　貫之
六帖衣
夢路のみたにはあらぬをうつゝにもあふよしもかな
夫木十六初冬　順徳院
新勅秋上　雅経
あすか川のやなせにはあらぬかはらの波の花をりてみん
○

ゆの部

一言

ゆ

新の秋上　順徳
月にうつりて ゆふしほにのこる入あかつき
○源　若菜下
ゆふ暮はいまさら身にしむや
てらすきしゆふぐれをまちあかしける○同　柏木　ゆふ
暮もゆふしめさし○同　同　ゆふ暮とおもひしをなかぬ○
同　同
あらし吹くゆふ暮にしめやかに
暮るともきゝしめせ○同　宿木　あはれなるゆふぐれ
ゆふしきてゆふ暮をすてみてかへりきしところを

つきてさむる○同 明石 思ひかくされて浦のあかく
たまくにあはまし○同 あけまき
○榮花若ばえの月 ところ川にかくされたるの浦せかくて浜をく
うへしつ浦なるよ○同 さわぐめ 四ウ ○同 同廿 七オ ○同 衣珠 三ウ ○
同 浦々別 六ウ ○宇治保 印本 あかの浅 古本 吹上
○讃岐日記 山にいはれの色ぐへのきらしかはまいは湯さき
しらまて立浦の色人まて出るのなみ○浜松四 人を
絶して浦かくかくす世の中へていききろみいまではさも
かし

二言

ゆあ
狭衣二上 浮帳のうちにことにまうしぬゆひおけれたみや
ゆうたおしのくのかきしまほと○

三言

ゆうみ
うるはしみ おほかたもの思ひのにゆゑ身てまる○
十六夜日記 長安 ゆかしさとまとも文字うちきたるん
浦海き○枕冊子十二 廿二 とく出て浦のうちまかす川

ゆし

ゆだて　湯立

康富記　文安六年九月廿九日栗田口神明有湯

立参詣拝見〔玉〕

万代秋神　秋歌と　中務卿宗尊親王
さかきはのかをかくはしみとめくれはやそうち人のはらふゆたてかな

○

ゆだね　湯種　○水口マツリナトシテマケハユタ子ト云也

万七
ゆたねまくあらきのをたをもとめんとあゆひ出てぬれぬこの川のせに

○

ゆたん
和名
まろうとにたて見る　○字類抄　中　吹上　ゆたんかひ

ゆつけ　湯漬
源　少女　御ゆつけくた物なとこき〳〵しの御
字類抄　春日詣　侍従の雨ゆつる　あれはゆつけのまし
けせきなとひとつのゆふ○　源　象

コレナンス
コノ子

○古事談三仁海僧正ハ件雀ヲハラクトアフ
リテ衛濱ノアハセニ用ケル也○菓苑

ゆのし　筆ノ緒ヲ九チニテカく也

源下 兼栄 ゆあんほいし申し○同田桜キ仕也○ 季
申しハゆきあんほくおほし○同 同同 四萩の隠けた
ゐらくまりしゆの殿ふかくしみしくきこそ○同明石子
つらしいといゆりかくめきゆの殿ふかくし㐂ゆり○
花 由の音にたのあそて筆の跡とゆけること是に上女
下よのあるを作り

ゆふ殿

菓花 五是 ゆふ殿の由ゆかしくとて二三十人あまりのくる
ナリ 俗室○和名伽藍具俗室○今昔廿二京ニ有ケ
ル下衆北山ニ木伐ニ行テ返ケルニ鵜ノ覆ヲ
通ケレハ湯屋ニ煙ノ立ケレハ湯ナメリ寄
テ行カムト思テ木ヲ湯屋ノ外ニ置テ入テ見
レハ老タル法師二人湯ニ下リテ浴ス一人ノ
僧ハ腰ニ湯ヲ渡サセテ臥タリ○

ゆふへ　禁秘抄につゝみもあり

異本堤中納言物語　夕へちかいほとゝときゝけれは

こえて○

ゆふき

う弦係あて文　ましき錯のまた錯入　ほけのおもきさし　の

うちきゆふきしてゆるのた来る○同花開　あやのゆ

ゆきほし祢のそのかもえき○

ゆかた　皆二之

葉花　花山四丁　ゆかたにかゝしゆきは○同　えさん以後　ゆかた

おほしあらは○源　氏女　ゆかたにみゆきもあらわれたし

ゆきめもい○

ゆかみ

後京極良基公榊葉日記　人のゆかたもさらにしあり

しうち○葉花　ここそゆるのか　ゆめみさらにしるおくはし

○

ゆやせ

菜花 埜三 わかくさもはるやせむらさきのしてた
はるやはるをのこかし

あきて

菜花 月宴 十八 九条 よめるやはるかなはるはまれてはる一とせれて
いまてかほんのして物とてくさきましもしらく
させるよほとた ○挟衣 雪やけなかしかたまでれ
やはしらなほさきとるれいまてつくろも物として ○続
詞花雑上 大弐院はちるやはせなふをさきのも
にてなてかへきとしもかをとなれしさせかへしたえなし

もえさくはるまて 弁院 算楫
みかはのやはなひもやまぶきのかよふらきは諸ひのこ
遊し 弁院 愈
たしかりともかにしるいかるをうさのそのやまぶきし
○菜花 そらのそらは はるかやまそめてさなかのらし
せなふはんにはるちまれちりちあらてさえいつかひぬ
○同 後悔大将 るかく倫ちりいしきるや大はるてれ
させさかなへい ○同 玉村菜 十六 ○同 秀林 十九

遊女（エウヂョ）
白女 古今 ○檜墻嫗 後撰 大和 ○宮木 後拾 ○靡 詞花
○戸々 千載 続詞花 ○妙 新古今 ○初若 玉葉 ○白 大和
○｜金 続世継 ゆみの後 古事談二 ○｜小観童｜｜観
童 古事談二 ○｜｜香爐 同 ○｜｜神崎君 目古
曾 同 ○池田宿遊君侍従 此宿ノ長者 湯谷カ女也 母湯谷 二入
ノアリ 晋盛衰記四十五 ○亀菊 承久記 ○河古久曽 続詞
花 ○祇王祇女佛 平家物語 盛衰記十七 ○とし弁 曽我物語
○江口尼 撰集抄 ○小馬 遊女記 ○主殿 同 ○妣
意 同 ○孔雀 同 ○三枝 同 ○河孤姫 同 ○孤蘇 宮子

カ全小
児 同 ○中君 同 ○土師 万葉十八 九丁 ○蒲生 同 ○
珠名 同 ○狭古 同 ○佐丈流 同 ○香爐 伊勢大 御集 ○
児嶋 万六左注 廿四丁 ○祇寿 万代集 作者 ○祇光 東鑑 卅六 ○祇
寿九 後葉 作者 ○力寿 盛衰記七 又卅五 ○妙 同八 ○嶋ノ千歳
若ノ前 同十七 ○盛衰記十七 寶ヤ祇ト云文字ヲ
ハカミトヨム也神ハ人ニ敬ウヤマハル、上
ニ神ニハ人恐ルヿナレハ吾ラモアエモノニ
セントテ祇一祇二祇三祇福ナト名ヲ付ケル
コワラカシケレ○

ゆきくれ　雪暮

十二集上
後鳥羽院御集
ゆかん人ゆくもとをえは久方のあまのかはらの雪くれの空
思ふにも身にしらるへきあまをとめかそての雪くれの空

ゆくゑ　行方ノ意ニ用七夕ノ例

長明集
あはれとはれ野辺の露にしをれつる人はいつこのゆくゑなるらん

千載　業成
いにし方の書路をたつねはおほつかなすゑもあるかしの行ゑ

へとゝ集

○

ゆくりか　不意ツ　不用意ナル意ニモ用也

源　若菜下
かゝる御ありさまになほしくなりゆくめる
をゆくかたにあやしくいあさましきはかなしとはゝ
はらちかほとゆくりかに○　蕣花を朝花
ゆくりかにもいてゝかくれなれ　きはえなふ○大和物語　ゆく
りなくいにしへの○同　ゆくりかにもなくうきえつきて○源
母女
またゆくりなくなりぬるにも中々絶なましきことの事也

ゆふかた　夕方
古の恋上　ゆふかたはこそ待つらん○

あふさと

山家集上
夕されや玉うこく露のさゝ竹にさ鳥まつならす蟋蟀

同下卅
夕されや〇拾玉三 卅六 夕されに〇同三八 夕されは

ハア
ラス

堀百関 倭形
あふさし卯きしき夕されに秋この関とるの浦風 〻散 小散

文ホ二 源基個
あさ〳〵きやる竹に夕されの露の庭いあちの雨さうけり

同廿八家の集十ぞあすの庭の竹を 敦仲
夕されはしのにさへるをつらぬきとめ夕されの空

新古雑上 西行
霞かゝる遠山もとの林さへいとゝや雨に秋まとのを

ケ乙キトイ
フ二近シ 〇

ゆふさえ
山家上
つし嶺山の岩かけ夕さえて落ちそのこの衣のこえけり

〇

めんつゑ
菜花 若枝 中門のほとにあつさつきてねふるほと秋と
〇同 音楽 あかきぬきることもいてきてつゑし
てきうわにうてい〇

あわ侍会 維摩會

清拱集　人のあねまえに大木へ行人申しいふたに

○

五言

あくらし　今俗異して　あくると云

菜花　玉のうてり

あきの山

公任集　四巣　○源　朝影　○枕冊子　らのあまし見えしを　うち作るもの

○公任集　廿二　○花鳥　朝影　花山殿後涼殿の茶

雪の岬
雪まろはし
雪あそひ

の南みつはまて雪の山つくらせて作文ありし事か

小右記にしるさる寛永元年正月十一日の事也○

菜花晩侍星 十九葉 ○公事根源　初雪見参○拾遺雑冬

雪と消へのうへに作りてこそ待られけれ消待られけれ

も　中務親王具平

ふくつもる雪消のは増りうるさまの消えしえたにつもりけり

○続古今　雪のふるおりて侍るを山のうへにつもりて

せめしけるにうへのをのさとも高つもり侍つるを待るを

よ侍也　後朱雀院

天地もうけたる年の志るしやあるまて雪の山をなるらん

○続拾 みなあらん事のついでに雪の山つくらせて侍り
ける朝によみ侍りける 周防内侍
あさぼらけふりし雪のいかにして宮井にかかる山となるらむ
○新後撰 恋五 雪の山つくらせて 三
こ ○宇治保 楼上下
○源 浮舟 あやしき尾しきくの雪あさましつゐの
やりかてそかうむあかりける○

かはらつき 泔器
字鏡 ○和名
○新古 恋四 かはらつきのなかるる…しあらしはそ 汌通

々 母々 ○うけらか日記 ○源 東屋 女君ハ
清かはらけ持てまいれり

湯桶(ユトウ)よみ

続紙 江次第四 ○続飯 江次第 ○続板 同 ○半尻(ハンシリ)
彼部 ○土道(ドラ) ○土間(ドマ) ○分捕 庭訓 ○透廊(スイ)
同 ○寂果(サイハラ) 左部 ○午本 天部 ○掛盤 加部 ○足駄
阿部 ○青瓷 阿部 ○哥曲(ウタコク) ○地敷 ○蚊蝲 加部
○野宿 ○苐忌 ○朝座夕座 衣珠 采気 ○縄纓(ナハエイ)(ケシ) 奈部
○地摺裳 ○平座(ヒラザ) ○白鑞(ヒラウ) 空穂 吹 上中 ○筍子 同あて 云

○千鞋(チカイ) 催馬楽 ○神楽 ○戸帳 東鑑六 ○本家(ホンヤ) オモ

ヤ也 宇弥保 ○土居(トヰ) 万丈記 ○書判(カキハン) ○骨柄(コツカラ) 盛衰記 卅三 ○

夕坐 今昔 廿八 ○今様 ○請奏(ウケソウ) ○継酌 ○折掛(ヲリカケ)

江次第四 ○春賀(ハルキ) 春代(ハルタイ) 江次第 抄四 ○庭座 同五 ○猶舟(ユウフ子)

○霰地 夫木卅 三棠 ○醰酒(タンサケ) 和名抄 ○此様(カヤウ) 土佐日記 ○

檜楚 和

ゆふけとふ 夕気 同 カタ 夢に衝くるく行末の命さるとそ

万十 十三丁 あしかをとらく夕卦同とあるは假字書のし

たまきの八十の衢に夕占問(ユウケトフ)うらまさにいへ妹くあひ見ん

万四 五十一 月夜にも門に出て立ち夕占(ユフラ)問足卜(アウラ)をそせしか行まくを欲し

○万十一 廿五 オ あかなくに夕けとふかと○同十四 廿一 ウ ゆふけも○同十二 廿三 ウ 夕けかもうらにも ○拾遺恋三 人丸 問まして告かへらうしまさにせよいづれかあるへく

ゆふつくひ

六百番 信定 夏くれのやまのあなたやまうれしあまはまのかげのうつる おし

○拾玉三 廿四 ○夫木 卅六 ○玉葉恋二 円 ○

ゆふ渡るし

渡 まつに 色々のれしらかさしして入りして夕渡さにくしあるは

とくとハヨヒヨリ早ク子タルヲ
新六 云也 此カタ本義ナルヘシ 信実
待わひしきのふの夕暮はあかしくれて猶まちもやらん
是ハ子ソヒレタル ─ 方ニ
イヘルナリ转誤ナラン ○源 手習 とひ侍と
きハえもいはれぬあはれしきいひきして 大尼君 ○藤
くは二上かるくハ夕暮といひしのみてやあひぬ ○源 狭衣
涙のみもかゝるは好ふときに立もあくひしのひて
とひ侍とひとし侍れハ物もえいはすえやみぬ○
ゆゑんかゝり
源 若菜上
起き出ん暁ちかく明ふかりける空みしらぬ夕暮かなる

○同 夏字 あさ涼しなかしらの夏かゝりてたれ 思ハ夏の 夏にいあ
万代夏二 小町
なる夏の涼しく
あかしとめかれよ秋に更ありける世の人を涼つゝて
○家集の秀 ○定家
六言
かりもつひ
源 みつからにたゝれきかりしもつひさぞあるへ
けむ○ 濱松二 涙かりもつひかかしけれとぞいふ
かるとせむこれ究○

雪佛（ユキホトケ）

康資王母集 おほしまうち（上文某ノ七シリトアリ）の雪を丸うの
佛につくりあてまつりて侍りしつらさしいてまし
るかく
いましめつるの林のうちきかうちかひきくもそ（新拾に）おもはさりけれ（同）
返し侍りて
ひとそへて雪の佛は侍ねんとも薪のつきぬとやみし
○新拾遺釈教 同 ○夫木卅四釈教 雪にて丸うの
佛をつくりなりて供養侍りて 瞻西上人（家同）
○

かも川をあはに
栄花（月宴）九 かみ川をそにあるやてまつるふしきかる○
竹取 湯さの海まはおほしくさあなけがしかりける○
かよりのほる 今俗湯アカリト云ニ同シ
狭衣二上 四十七 湯かちうの侍りてふしまへる湯ちは○

七言

かくのぎしき

ユトノハアウカヒ
七日ノユ

狭衣四上ウ 卅五 清陽殿のきしきありさま九日ら清て
のけうふやしあらまうゝ〇源上若菜 西とのおち君
いもう清う世ありて清白とのあつひ昨うをつう
清つとゝ〇河海花 ゟて考〇菓花 後悔大將 いかい七日に
て清白のあるくられい〇

ゆゑかゝるゝぬ日
東流第三 菅かゝるぬ日ら いかりのあふとをきうつ
〇りしておきし ついてふ
菅ゆなんらえ派所あんのちくうかにやかるみあ所うむさ時らん

ユキスリノ行幸心
ユキスリノ人

八言

ゆきもりのもくせ 行摺宿世
狭衣二上 卅二 いとかしあもしくもひふむしるの
ゆしにゆきほりのもくせあるんやハありん〇今昔廿八
一行摺ノ行付心ニ又行摺ノ人ノ宣ハムフヲ
続後撰恋一 後忠 あかの海やとほる船のほりふはのみハ人のとなきあは

九言

ゆえに牧かく

万

いめにあふとくしるかはなおさむ妹をあはんとおもひけりつるかも

古今一
いめにあふこともあらなくにいかはかりあるへきものをおもひけるかな

拾遺
ひかりまつ枝にかゝれる露の命かくれはてぬる身をいかにせん

○涅槃経是身無常念〻不住猶如雷光暴水幻
炎亦如畫水随畫随合○

夢とやいはむうつゝとやいはむ

小侍従集
うつゝにはあらぬうきにあはれみし夢といひなにいひとこひあそ(?)

○

十言

ありとほしおもふかな

小嶋口号 見渡せはしらゝたはまにたつ

にしきゝてしのひしにこそ

さりとてもぬ山のなかにてもあかとほらへ

○

フツレンノオンニエルシニヤ
フノ部ニ入ヘキカ

十二言

佛神の清あるしみや 佛神ノ文ハリトイフヤウニツカヒタリ語例考ヘシ

花鳥月宴 ふ川志んの清あるしみやりふ清んの中にも

あるらしきはんやありなん。

○よの部

二言

よき 斧

後撰恋六 よみ人しらず

あしひきの山さへよはるかなしさに恋はてゝなけきさへつむ人は よきかは

○和名 金葉恋下

六帖

このよ時も

夜着 ヨキ

吉田鈴鹿家記宝徳元年四月九日花園殿ヨリ

ツターー傳
マカーー迷
サカーー境
カヽヨフ耀
モコヨフ匍匐

中畧 小夜着一ツ御本所へ参〇

十二
某らん

垂仁紀二年条留連嶋浦〇万六廿 加我欲布夕

マヨトラスハヤスシ

散木九帳躬百首中
さゝ山にふる霰をふすまにて春とひとつさらふ身といふかせん

家集上月并菊
春せぬくは何と志るれと春も月も春るゝふ志る事の花

異本拾玉倶舎宗
あの春くゝ春かゝふての月をうらふ志ゝあるにまさるかのくに

頼政集寄山恋
こきもあかさかゝる山のせき須りいあちしとかゝ須てゆ須

〇枕冊子 四十四段 雪の山春てかゝをつゝらひらんさらそ 本 今

ニハツタヒトアリ 話
本ニツタヨヒトアリ

よめ 夜目
清愼公集
てもかゝらまひもやはらんと兎にても志るきかゝ人のんをそみし
和泉式部集
ての事かきゝゝかゝて ふる雪とも見えにいあるき月かゝそみる
〇栄花 お晴々く 女房の袖口袖あも志るく〇

よゐ 夜居
源若菜下 とゐれしめてもちかくさふらふ女房のうちのおんとも
ぬき須てれとく〇 後拾雑三 後朱雀院の御時年

ーー僧

楳居つゝ侍りけるに後冷泉院位さりせ給ひ

又のとしに春にて後上東門院にまゐり侍りける　天台座主明快

雲の上にひかりかくれし夕より　いくよといふに月をみつらん

○栄花　根合

とき　時より　ときもとに同じく二もじ三もじは二もじ三もじあまた

万代冬　中務　いつくちりきつ鷹のとかへるもしもなし

ときはなる山きそめしむしろをもしらぬみるみるかをりなき

○家集の考

千俳諧　橘俊綱朝臣　年よりして栄根の山にあけくれてみるみるあかしせしまに

信明集　あけてみしうけめふしきは後撰みるみるみるみる書きそへなかりけれ

○

三言

ときは　吉日

栄花　月宴　五十五　○同　四オ　かくやく落つは

ときづく

竹取上　四十九ウ　委注　○

よ出兇

業集
よしあしとも見えぬほとなるなにはえや梅の月夜もいてかへりみし

よしあし　横月

○
六帖 よしあし 三 よしあしのあれ／＼あふつきなくにいはにもつに。 ヨソ心
クセサタメ給 ナリス
夫木廿一 松 フチイヘリ 信輔朝臣
杉椿とはしら松人はあはれとあれと君ほかにはよしあしやはら

○
よしはら
六帖
いつもよはにかくれかき笛竹のよしはらやきみさへとおもふもかれ 八新勅

○ 濱 浮舟 あれはうみの人にむかしはさえぬくしもそかし
うみしきはけにいはれ候ぬ。○

よそげ
よそしくしげく
新古冬 慈円
かへちよりいはのうへゆくよそかしよそげくおけるりきのうみ
夫木十四 西行
草のかけはりぬきれてうは野のいろよそくへのもろて

○

よづま 夜妻

○ 催馬楽 ○ うけらか 長うた [illegible]

かた川波たちあかりけん ○散木集

よとむ　たれはしてなとよ淀ちにけり

万四
よ川花のちるへきものをもとこのまれきれたらしよとむころも

よる浪　夜間

保憲女集
なにはの浪のよるまにもはまちと風のたてまちるあやかしそみゆ

同
秋風のよもきか庭に萩のうへにそよのわきそれて人そ恋しき

よひね　宵居

源若菜下　例のわたし渡さぬ秋はよひねしたひて　○同未摘

和泉式部集
さひしきはよもき集れかしに
まぬ人を待さめしつつもむしさはねさめふしのよひねそくり

○

よほろ

和名膕　○菜花同宴　湯もわていとを

うけ身てよほろゆかしにわけし涙　○水鏡下　大隅

の國へかへつかえしてよほろよちをもちてき　○字

鏡　○うつほ保　樓上 中　とくしらほろへ絶

へまし　○菜花　きえいろふし　今年は八よ那せるひける清

らしいしらほろもかりみえし　○武烈紀　男 ヨホロ 下

全裂　菅原家経朝臣

みつきさめるきふしらほろをかきふれはみ晴の星人かほそひにけり

長木一　天徳二年正月庚申夜哥合　菅原実樹

君うちにみ晴の星人うち已まてかゝきかゝ多く　若菜をつみ

顕輔集

○　こりきこよめちきふしらほろしおかられはみさしさりあつきあふ坂の関

し晴樹　隔夜

新六一しはえてある

六帖

しもや

保憲女集

ちるめ那しいしもや晴れに吹くるに雲のかほりていつきつむ

○　四言

しありき

菜花　う色野　うちえ人清きありきのからしきを　○

同　同　清らありきのきむしみむいしくしりてはせるひて

よさり　夕○夜

催馬楽 刺櫛　安之奈止利与宇左利止利　朝取 夕取

也　○さゝしれ　とりみなのうへとり○

よかるり　世談

菊花 月宴　よかなりにも似るなるべし○

よぎみち　万葉

林葉 三月送行客

よくはる　拾玉四 四才

紐ときのゑさんぬあさきせにほしてたくみゝせかん

○

よさきる　詞花秋

天の川よこぎる（取捕）雲や七夕のそらなきを見つかゝし

万葉四　あまや海をよきる雲のいさよくされてゑましてくにゑてゆれ

○

かさゝぎる　生サキコモルヰ云
源あげまき　さるいきほひかさゝぎりたるほどとみて　○大
鏡一条陽成　いまはかさゝぎりておはしましける時

かしはぎ　俗ニヨウデモナイト云意
拾遺貞外　年ふりてかしはぎ杜のしたにゐて言の葉のさかりも絶しまに
○濱杏一　かしはぎ下に住とも必ず人にいはれて
めづらしき笑みたひて○

よせふみ
續世継　よそ人のうへ　かせふみをなして侍りきあはれなん
ゆくはかりまそへ　○　アツカリ物ノ証文ト聞ユ傍例考ヘシ

ゆたけき
源若菜上　侍ちつかひ御よのおもくしくゆたけくうる
ゆきたに　孟　おほみそしくしき御まつり侍る或説廣大の
心なり　○同最勝王経金剛般若寿命経御てうむ
ゆたかなる侍りのり　○孟　ゆたかなるにおはし　○源玉鬘
今のうちにさしもちかくゆたかなるさましをいとふして

いひつけたる○河寛舌（ニゲナキサキラ）弁舌の事也 ○細 廣大弁舌也
○濡 浴也 ぬれせしなみたはきしきおもくして○同 橋脈
四十○菜花 そらのしつく きぬにこぼれてあまきはなほと
いとなみけく咲り
丈木廿三江 つくはえの玉にの芝のなみたはきしかりのとうきにこぼれにけり なき人をしのびて
山家集 ちりかへつふしに人のあはれをひきてなみたはきいろをほとくへそゆく
○
なつかぬ 見ナレ聞ナレヌ方ニイヘル
菜花浦々別 なきともおほえぬ人のみさくとれうれ
いつもいひしあやしかりなかぬ花にくく見えけりこそ
○
なかの緒 琵琶
なかれをに見ふんなとえへり きさあるけとも えへくもなし
なみくち 家ノ詠風調（ヨミクチ）
落書露顕序 いつもの家仙いつもの詠みくち世にみち
たおとして○長明無名抄上 さきる代にもあ
はなくちもあれは○同 今はなみくちなくもに

わりなき人こ○

よし宇治　四方八表（ヨモヤモ）

清輔集　女のもとにゆきてかへりまゐりてよしやに
夕の鬼につと○菜花　花山　よも宇治の人

清輔集
よし山に花浅川ほとの白い

○袖中四十八　よも宇治のこゝろうきつけあるをあり○

菜花　ことの花かく　よしや治み　○同　珠衣

よし宇治のほとけ神をなかれ給ひて

二条大皇大后宮大弐集
なふへきうちかきぬいよも宇治を席出鬼なる茎のあけほの

拾遺神楽
よも宇治の人も身かはりとほうちを神のうたへにたふ夏まゐる

和泉式部集
よも宇まの売りきをみまいられしくて庭かきぬへき杜の夕暮
（夕ぐれの庭の事）

是ハ四方山ノ意ニ用

よしあし

続世継　かりう給
又よしあしにおそほるとも已りしもあり
うるきてにかんたりる○

よろし　佳○愈

千雑中　やうとあつて東山かる所に待りけるをよろ

しくれて後〃〃○山家下廿二風にまひて〃〃〃
ふしくれあと○浜木三よしそらの浦さ海くれ
え○

よそほふ
拾玉四四十よそほひして○

五言

よそのいり
土佐日記下
きしふ松のつれてのあるきましける日をよそかいりはしぬけへはれ

ヨモノ海

○四五十日ト云意也

よもの海　四海
後拾遺序よもの海○紫集よもの海

世のかなた
楽礼　楚王篇　世おかくめれておもしほきて○同根合
かくさほしとめて多く世のかなたと似せなへき一
の人なち○

しめゆひき　せめきをえといふに同し

萬葉　うゑてぬ夏　しめゆひきをしそう○

しほなもし　ゆふまもし　由郊

しりあかる　提揚（ヨリアグル）之○声ニイヘリ今イフカナキリコヱヲ出ストイフ意ナルヘシ

長明無名上　なかく詠けるをしきおとしてしとかて

ちをいらかし　声を　しりあけ　なかさは

新六

しるよしの

萬葉 峯の月　ゆくへさのきひこにしるしれのしれなて

まつせなふ○

六言

しりのさとろ

拾玉四 五十二 法華経勧発品

法のみちを佛のみちにつきふとてしりのいにしし入り

○

しりの海きりて

拾玉四 四十九 法華經分別功德品

よそあつらし

嘗花月宴 みかさきさきの法も免あれこゝの法とて

なかりしを○

ヨモキノセキ

よもきのあと 灸痕

隆信集恋六 もいれねてねて さいとしれとしなる

たえさぬ中も忘るらふをしなきそて

朝ごとの露ぬる袖は 枯風に よもきのあとも 宿のみぬ

返し

みるらん よもきの跡のくちきさん 家の言の葉もいつしえましに

夫木廿八 為家

言はゝ名のみもつとも 何しててふりきよもきの跡をなくさん

千五百番 寂蓮

みにつもる風のかよひち 露は よもきの関をいそきしより

○今物語云 大輔入道ときこえし 寂蓮 家の よもみ 中略 風の

けるて 急浴しりたに 人のこゝろとて 結ける返事に

年へたる風のかよひち露ぬれは 蓬の関をいつるものを

よりしかき

志の露 経上 りにうるてしくよりしきに人にもあり

りかな○涙 初音 たえし わけぬと なる かきり よしく

しく情ありとも見て めでたくぞつけて

かへ人なり

夫木七 家隆

かはるをもかへ人のかへさおもふらむ君にあふよのためを待り

和泉式部集

神かけて君はあらがふ誰かさはかりへ多情ふるといひける

袖中四

さもあらばかへ人の身にうけ給へめうけしあらひをたまはれ もや

○

かへさつゞふき

草花 見えそめ菖 十九オ ○

九言

かへるをもとむるにいそく

草花 二 さはしのかへさい かへるをもとむるにいそうせなふ ○同

同 廿 同○竹取 かへるをもとむるにふれて来し免なふ 子安 貝オ

十 り ○住吉 かへり川をさかへるをもとむるに来りたい ○

大和 かへるともいそげとむるともいそげみけていたりけり ○草

花 衣珠 ○同 若水 ○濱松二 二オ ○同二 三丁 ○字

保 吹上 四十ウ 中 かへるをもとむるにふれてねんいそき濃してたし

○讃岐日記 秋をもとむるにふれて梅も咲えぬまでい

そく気もい○

十言

ゐるのやとあはれさし

十六夜日記浦人のゑらきみやこ振りなりくまかる

ゆかりいと見ゆうきみはふ振まい秋の宿あはれさし

といふなる人の言葉も思ひ出づる○文集　縛戎人

夜臥腥臊汚床席○